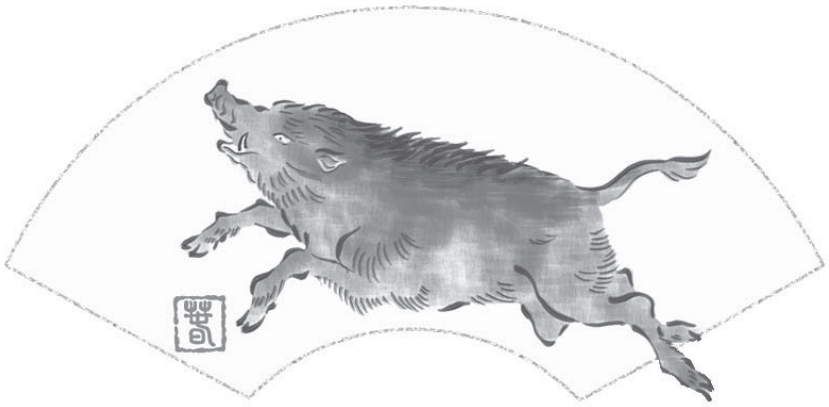
新春随想



心の中の青春
函館市医師会　後藤　曄

20年ぶりに北海道に戻ってきて
胆振西部医師会　小野寺　隆

受容と忍耐
恵庭市医師会　田中博文

私の定年
上川北部医師会　若山芳彦

還暦を迎えた団塊の世代
札幌市医師会　木島敏明

祖父の上湧別訪問
旭川市医師会　山﨑知文

院内コンサートの試み
札幌市医師会　長尾雅悦

疾走-初冬の樽前山麓をひた走るライラック6号-
石狩医師会　御園生　潤

私の今年は?
札幌市医師会　梶野永津子

還暦を迎えて
上川北部医師会　山口　彰

2007年を迎えるにあたって
旭川市医師会　今本千衣子

当世医学生気質
札幌医科大学医師会　當瀬規嗣

オピニオン
旭川市医師会　林　宏一

近況報告
札幌市医師会　広瀬るみ

変化と未来-無関心と競争と行き詰まりの世界から愛と調和と無限の世界へ-
札幌医科大学医師会　深尾充宏

田舎医者でいるわけ
遠軽医師会　田中　実

新年明けましておめでとうございます-今年60歳になります-
札幌市医師会　加藤光子

「おやじクラブ」
江別医師会　松本　修

Life goes on
空知医師会　館農　勝

昔は良かったなぁ
美唄市医師会　伊深清次

日本ハムファイターズ日本一おめでとう
札幌市医師会　後藤みずほ

蝶よ羽ばたけ
北見医師会　茗荷秀昭

めまい専門病院を開業して10年
札幌市医師会　山崎　勤

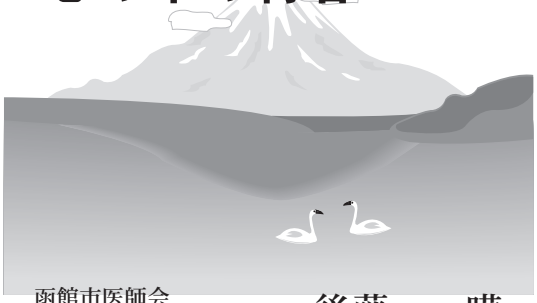
酒の飲めない男-人生60年間を振り返って-
小樽市医師会　津田哲哉

乙部の恵み
桧山医師会　村瀬英也

運命の分かれ道
函館市医師会　秀島道治

（順不同・敬称略）

心の中の青春



函館市医師会
ごとう内科胃腸科　　後藤　　曄

青春
青春とは人生のある期間ではなく
心の持ちかたを言う。
薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな手足ではなく、
たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。
青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは臆病さを退ける勇気、
安きにつく気持ちを振り捨てる冒険心を意味する。
ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある
年を重ねただけで人は老いない。

理想を失うとき初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心はしぼむ。
苦悩・恐怖・失望により気力は地に這い精神は芥になる。

60歳であろうと16歳であろうと人の胸には、
驚異に魅かれる心、おさな児のような未知への探究心、
人生への興味の歓喜がある。
君にも吾にも見えざる駅逓が心にはある。
人から神から美・希望・よろこび・勇気・力の霊感を受ける限り君は若い。

霊感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、
悲歎の氷にとざされるとき、
20歳であろうと人は老いる。
頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、
80歳であろうと人は青春にして已む。
サムエル・ウルマン

原作者は幻の詩人と言われたサムエル・ウルマンである。1840年ユダヤ人の両親の長男として、南ドイツ、ヘッヒンゲンに生まれゲットーの少年期は抑圧された生活を過ごした。その後アメリカに渡りアラバマ州バーミンガムに住んだ移民で、ユダヤ系ドイツ人であった。このことがウルマンの人生の原点であろう。ウルマンの人生は多くの点で「成功」の意味を定義しなおした。南北戦争では負ける側に立って戦い聴力の一部を永久に失った。資産家にもなれず、最後の四半世紀は妻の親しみと愛なしに過ごした。しかし失望によって征服されることなく家族の愛と温かさ、信仰の意味と保証、そして共同体への奉仕、孤児、女性、黒人、労働者の利益と擁護を通じて自己憐憫と厭世主義を克服したと紹介されている。また啓虔な楽天主義者とも紹介されている。

この「青春」は家族がウルマンの80歳の誕生日の記念に自費出版した詩集「80年の歳月

本会では、例年新年号に「新春随想」を企画し、年男・年女に当たられます会員諸氏より無作為に選定させていただき、執筆をご依頼申しあげております。

時節がら、ご多忙にも関わらず、ご寄稿いただき感謝申しあげます。

北海道医師会会員数は、男性7,646名・女性786名の合計8,432名。(11月30日現在) そのうち亥年生まれの会員は別表の通りです。

◇情報広報部◇

(名)

	男性	女性	合計
36歳	67	22	89
48歳	252	22	274
60歳	204	13	217
72歳	107	4	111
84歳	54	3	57
96歳	1	0	1
合計	685	64	749

の頂から」の巻頭の詩である。ウルマンはこの詩集が発表された2年後の1924年に84歳でこの世を去っている。

私は今年72歳になった。以前読んだウルマンの詩を最近読み返すことが多くなった。ウルマンの80年の人生経験の中から生み出されたこの詩は何度読み返しても感動を新たにする。幻の詩人といわれたウルマンは21世紀になった今もまだこの詩に多くの人が感動し勇気付けられていることに何を感ずるであろうか。

「80年の歳月の頂から」と題した詩集には彼の人生の体験の中から生まれた力強い良い詩が多くあるがこの「青春」がウルマン78歳の時の詩と考えるとウルマンの人生はほとんど完結に近づいている時期と考えられる。故にこの詩の中にはウルマンの人格や思想のすべてが表現しつくされているようにも思えるし、78歳までの精神の軌跡をこの中に読み取ることもできるであろう。この詩を読み納得し感動するときこの詩は自分の生き方の哲学にまでも変化し昇華するように感ずる。反面、今までの人生の時々の反省も強いられる。特に老いを自覚して勇気を失ったとき、失意のとき、自分で自分をギリギリの限界まで追い詰めているときや、追い詰められているとき、体を張って何かに賭けているとき、大きな決断と勇気を迫られたときなど、大きな心の支えとなり勇気と希望と素晴らしいエネルギーを与えてくれる。

78歳の人間が自分の青春を老いてから改めて自分の心の中に描き出し自分の人生の体験と重ね合わせて表現したこの詩はやはり訴えかけてくる力は単なる老年賛歌ではない強力な力を持つ。

ダグラス・マッカーサーの座右の銘となり、松下幸之助のパナソニック創設時の決心の引き金となり、ケネディー兄弟の弔辞への引用など世界の著名な人々が人生の挑戦の中で心を決めた要となったこの詩には時代の変化を受けない、国を超えて人々の心を動かす何かを持っている。

機会があったらバーミンガムのサムエル・ウルマン記念館を是非訪れてみたいと思う。

「青春」の詩
サムエル・ウルマンの生涯とその遺産
マーガレットＥ・アームブレスター著
竹山　宗久訳

20年ぶりに北海道に戻ってきて

胆振西部医師会
伊達赤十字病院
小野寺　隆

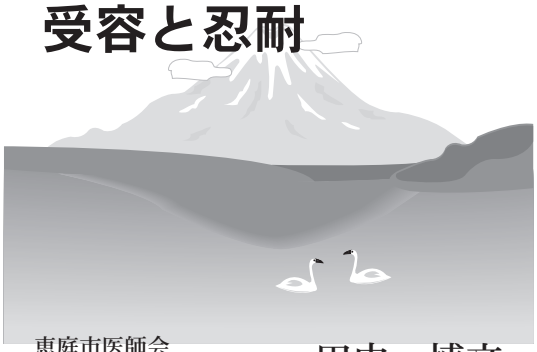
昭和60年に北大を卒業してから大阪での研修生活を選び、そのまま大阪で勤務医として過ごしていた。もう北海道に戻ることはないだろう、と思っていたが4年前に家族で北海道に住むことを決めた。家族は先に伊達市に転居し、しばらく逆単身の生活が続いたが2年後に私も伊達に勤務地を移した。

私は室蘭で生まれたものの学生時代の6年間以外はほとんど関西での生活であり、妻も大阪出身で大阪を出たことがなく多少の不安はあったが北海道に来て良かったと家族皆で思っている。子どもたちが都会の生活に馴染めなく家族皆で悩んでいたが、こちらに来て身近なところで夏は釣り、サイクリング、キャンプ、冬はスキーが楽しめるようになりのびのびと成長している。

私も学生時代はできなかったが、休日は家族で北海道の自然とゆっくり触れあうことにしている。日帰りであるが伊達周辺の温泉地を巡るなど都会ではできない生活を楽しんでいる。この年になって学生時代にはまったく上達しなかったスキーの練習にも励んでいる。

医療現場は関西に比べ医師不足が顕著で苦労することも多くなったが、それはそれでやりがいがありこのまま北海道で頑張っていこうと思っている。

受容と忍耐



恵庭市医師会
我汝会えにわ病院
田中　博文

昨今は私が医学部を卒業した頃と比べて、情報量が格段に増したことはこの誌面をお読みになる諸兄も同感であると思います。また、同意書や他にも署名を必要とする書類も激増しています。たいていのものには忍耐し受容するのですが、過大な情報量に対してはわが身が制御不能になることがあります。また、なかには後から考えると忍耐しがたい文書もあります。

私事で恐縮ですが、私は趣味の一つとしてアマチュア無線(ハム)を楽しんでいます。携帯電話が今ほど持てはやされていない頃は、便利ツールとして違法に？アマチュア無線機器を使って連絡を取り合う人々がいて、苦々しい思いをしたこともあります。まぁしかし、この程度のことはハムとして受容もでき、忍耐も簡単です。これらのことが困難になるのは、実はハムが自らのアンテナ設備上に問題を抱えた時です。送信機からの電力がアンテナに受容されずに、大半のものが突き返されてしまうという事態です。要するに、電波が飛んでいかないわけです。飛んでいかないどころか、場合によっては高価な送受信機が壊れてしまいます。

余談になりますが、手術の時によく使われる電気メス（高周波メス、ほとんどが0.5MHz前後を使用している）は送信機とよく似た構造になっています。使用方法を誤るとメス尖端から電気メス本体へ電力が突き返されることはアンテナ理論と同様です。送信機と違い、格段に高価なものですし第一人身事故になる恐れもありますから、そういう時には自動的に送信(出力)オフになる仕掛けになっています。ハムであれば突き返される電力量を簡単に測定でき、壊れる前に手だてを講じることも可能です。このことをマッチングをとるといいますが、医学部の卒業生が研修先を選ぶときにマッチングを受けなければならないのと同じことです。すなわち、片方のリクエストが他方の受容能力にどの程度見合うものか調べることは研修制度に限らず、不連続なもの同士の相性を表わすのに不可欠だといえますね。ハムのアンテナマッチングであればいろいろな手段があり、中にはどの雑誌にも掲載されていない(荒唐無稽な)手段でマッチングをとる勇敢な？ハムもいます。

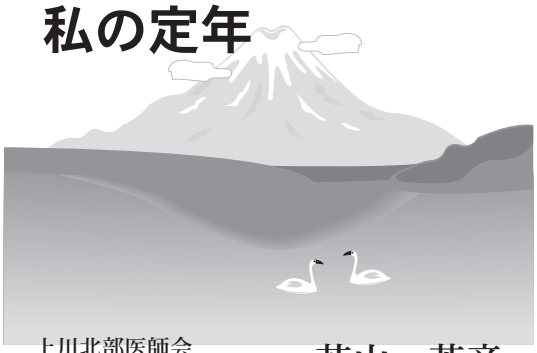
ひるがえって患者と医者の間を考えることがよくあります。さすがに荒唐無稽な手段では対処できませんが、アンテナの例をあげますと、たとえば50ワットの電力のうち45ワットほどがアンテナ側に吸い込まれれば合格です。この場合にはハムとアンテナは送信機を介してとても良いお付き合いをしていることになります。患者のリクエストは、担当医がある程度のキャリアを持っていれば正確に把握できるでしょう。このリクエストに対して医者のサポートがどのくらいのものであるか、またこのサポートがリクエストに相応しいものであるかを判断することがマッチングに当るでしょう。症状と治療がすべてマッチするものではないこともよくあることでしょう。しかし、ハムが念じるマッチングと違い、

小生が居住する地元のハムクラブの面々とフィールド運用を楽しむ（左から二人目が筆者）

患者とのマッチングは徐々に改善することがあります。双方か片方が歩み寄るか、妥協するなどして好マッチが期待できるのです。このことは人間の世界だから可能なのかもしれません。ハムの世界では、私が精神的にいくら妥協しても絶対にマッチングはとれないのです。

人間のことといえば、たとえば政治・外交問題も例外ではないです。当節ではイヤでも北朝鮮問題を報道され、考えずにはおれない時もあります。私としても、とてもマッチングはとれないとみているわけです。しかし、やはり同じ人間の世界のことですからこの先どうやって解決していくものか興味津々といったところです。最大の受容力を最少の忍耐力で発揮できることは素晴らしいことですから。そうはいっても、情報が渦巻き署名文書が飛び交う世界にあっては、私はやはり人間らしくなれないような気がします。

私の定年



上川北部医師会
音威子府診療所
若山　芳彦

昭和22年猪年生まれで還暦、60歳を迎える。自分の気持ちの中では、もう60歳か、まだ60歳か、といろいろな感慨が交差しています。

振り返って見れば、24歳で医師になり大学で小児外科医を志し15年、千葉市内の病院で小児外科医、外科医として働き16年、僻地医療に携わるべく北海道に渡って4年、幸い患者さんに恵まれ幸せな医者人生を歩んでこれました。

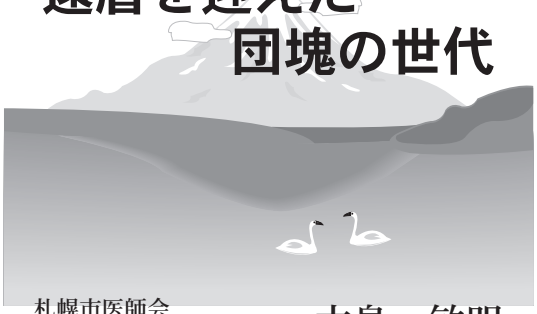
60歳というと一般的には定年の年齢となるので医師の定年についての私見を述べさせていただきます。勤務医は定年を迎え違う病院、分野に転進する人が多いし、開業医は60歳で引退する人は極めて少ない。いずれにしても医師としてまだまだ働いていくと思います。医師は何歳まで働いて良いのか？年齢は関係ないのか？どのようになったら辞めるべきなのか？判断基準には多くの要因が考えられます。

まず自分自身の体力、気力、医師としての能力、医療機関でのポジション、役割などが考えられます。さらに、開業医にとっては地域での役割、後継者の問題、経済的な問題なども重要なファクターだと思います。また、仕事一途で趣味があまり多くない医師はリタイア後の生きがいを見い出し難いなどが想定されるが、個々人の考え方、事情もあり一概に決められないと思います。また、多くの人（私を含めて）は自分に甘く？年齢と共に判断力も鈍ってくるので正確に自己分析できる人は少ないと思います。さらに、医師に向かって「もう医師を辞めた方が良い」と言ってくれる人は皆無に近いと思われます。私は今までに多くの老害の医師に出会ってきました。若かった私の目から見ると明らかに時代遅れの診療をしているのに御本人には全くその自覚がなく、失敗を繰り返してもあまり意に介する様子が見られない。このような事を避けるため50～60歳頃には医師としての定年を自ら決めておいた方が良いと思います。

医師は自ら定年を決められる特権を持っています。それ故患者さんの命を預かっている医師は自らの進退に重大な責任を負っていると考えます。その時点での標準的な知識、診断能力、治療方法についていけない医師は任を降りるべきだと思いますがいかがでしょうか。

そんなことを言っている私自身がその老害の門の前に立っているような気がします。患者さんの名前が覚え辛くなってきた、新しい薬の名前がパッとは出てこない等、自覚症状がぽつぽつ出始めてきています。55歳で体力、集中力などの衰えを自覚しメスを置き、北海道で一番小さな音威子府村で10年間働く覚悟で移住して来ました。自分で決めた65歳まであと5年間、日々の研鑽を忘れずに有終の美を飾れるよう努力していきたいと思っています。

還暦を迎えた団塊の世代



札幌市医師会
札幌南三条病院
木島　敏明

本欄の依頼は、新年の年男・年女に当たる会員のなかから無作為に選んだとのことである。12歳の会員はいないであろうから、最小年齢24歳からはじまって36歳、48歳、60歳、72歳、84歳、96歳位までの会員の投稿があるのでしょうか。ということは毎年同じ年齢のかたの投稿があるということになりますが、何か不思議な感じがいたします（実は何も不思議ではありませんね、毎年干支は1つづつ回っていくのですから）。しかし、過去から未来にかけてこの同じ年齢の方の考え方などをまとめられたら興味深いものがあるなーと思います。一度、こういう企画もあってよいのではないでしょうか。

さて、私ですが60歳になります。世にいう「還暦」です。「赤いちゃんちゃんこ」「赤い頭巾」のいでたちが思い浮かばれます。しかし、昨今の60歳はいまだ現役と自負し「そんなもの着れるか」と断る方が多いと思います。かくいう私もそれは遠慮すると家族に言ってあります。ところでこの「還暦」ですが、華甲、本卦還りともいわれます。還暦の「還」は「かえる」「もどる」の意味で、「暦」は干支を意味します。干支というのは、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十干と、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支を組み合わせたものをいい、60通りの組み合わせがあります。それで60年で干支が一回りして、生まれた年の干支に戻ることから、「還暦」というようになったとのことです。また、華甲ともいいますが、「華」という字には「十」という文字が6個と「一」が1個入っており「61」となり「甲」は「甲子（きのえね）」で、干支の最初をさしていることから、還暦と同じく数え年で61歳を表すようになった。この還暦のお祝いは室町時代に始まったといわれています。還暦すなわち本卦還りは生まれた年の干支に戻ることから「赤ちゃんに還る」という意味と「赤は古来魔よけの色」とされてきたことから「赤い頭巾、赤いちゃんちゃんこ、赤い羽織、赤い座布団」などを贈る習慣ができたそうである。ちなみに120歳のことを大還暦という。また、還暦土俵入りなどもあります。現役時代に横綱土俵入りを行っていた元力士が還暦を迎えた際に、親方で在籍していれば国技館で土俵入りを行うことができるそうである。栃錦が昭和60年に、初代若乃花が昭和63年に、大鵬が平成12年に還暦土俵入りを行ったそうである。

ところで話は全く変わりますが、私は、昭和22年生まれです。現在何かと世を騒がせている「団塊の世代」なのです。なぜかと申しますと、申し上げるまでもなく2007年「退職」を迎える世代だからです。いまさら親を責めるつもりはないですが、あの大戦を終え命からがら復員し一斉に伴侶を得、大量の子どもを作ってしまった結果が現在の悲劇を生んでしまったといえます。これから先、年金の問題、高齢による医療・介護給付などと、少子化があいまって将来の経済はどうなって行くのか問題は山積している。この「団塊の世代」なる新語を最初に提唱したのは、かの有名な堺屋太一氏である。昭和51年「団塊の世代」（講談社）を出版したのがこの名の由来である。そもそも「団塊の世代」とはどの年代を表現しているかというとそれは曖昧です。狭義には昭和22年（1947）から昭和24年（1949）までの3年間に生まれた者を指し、広義には昭和21年（1946）から昭和25年（1950）までの5年間に生まれた者を指している。狭義の人口はおよそ680万人、広義では1,090万人となり他の年代から突出している。また「団塊ジュニア」もやはり広義では990万人と多い。世界はどうでしょうか。やはり団塊の世代はあるのです。米国では「ベビーブーマー（baby boomer）」といい、1946年から1964年の間に生まれたアメリカ人とあります。米国の団塊の世代が長いのは第二次大戦後も朝鮮戦争だのベトナム戦争だのが続き復員兵が持続していたためといわれている。この間に生まれたのは7,600万人で全米人口の29％を占

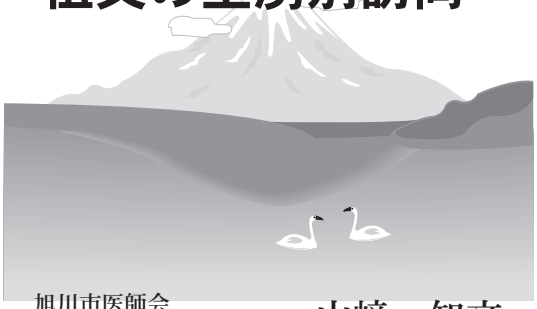
める。カナダでは「ブーミーズ（Boomes)」といい、イギリスでは「バルジ（bulge)」といわれている。

私は昭和22年生まれなのでこの年に生まれた有名人をちょっと挙げますと橋本大二郎（高知県知事)、衣笠祥雄（元プロ野球選手)、ビートたけし､星野仙一(元プロ野球選手)､尾崎将司（プロゴルファー)、西郷輝彦（歌手)、鳩山由紀夫（政治家)、奥村チヨ（歌手)、井上順（歌手)、三遊亭小遊三（落語家)、エルトン・ジョン（ミュージシャン)、梶芽衣子（俳優)、伊東ゆかり（歌手)、千昌夫（歌手)、若松勉（元プロ野球選手)、寺尾聰（俳優･歌手)、江本孟紀（元プロ野球選手)、せんだみつお（タレント)、稲川淳二（タレント)、アニマル浜口（プロレスラー)、中原誠（将棋棋士)、泉ピン子（女優)、ヒラリー・クリントン（クリントン元米国大統領夫人)、西田敏行（俳優)、尾高忠明（指揮者)、立松和平（作家)､スティーブン･スピルバーグ(映画監督)、などなどがいます。たしかに団塊のわれわれは小学校に入学したときから競争社会に入ったと思います。受験戦争なる言葉もわれわれの時代からつけられたと思います。しかし、そのころは集団就職に代表されるごとく高度成長期にさしかかり都会にどんどん就職していく時代でもあり、就職難ではなかったと思います。われわれが中学校を卒業するのは昭和38年です。あの井沢八郎（国際派女優・工藤夕貴の父親）の「ああ上野駅」がヒットしたのは昭和39年です。まさにわれわれの同級生が都会を目指して集団就職していった頃のことです。上に挙げたごとくさまざまな分野でそれなりに名を残しております。皆、良く頑張ったんだろうと思います。

昨年暮れに読売新聞社が「団塊の世代」に対してアンケートを行いました。その結果、プラスの面では物質的に豊かな社会になったが80％、技術革新や情報化が進んだ62％、女性の社会進出がすすんだ58％が上位3位でした。一方、マイナス面はモラルや道徳心が失われてきた80％、将来に希望を持ちにくい社会になった61％、地域社会のつながりが薄れてきた57％、家族のつながりが薄れてきた54％、過度な競争社会を生んだ52％、まじめに努力することを軽んじる風潮が広まった50％が50％以上の項目でした。また、戦後の日本社会の発展に貢献してきたとの自負があるかでは､「ある」(計49％）と「ない」(計50％）が半々でした。結論､「がむしゃらに働き、経済発展に貢献してきたとの思いと、良き伝統やモラルを次世代に伝えきれなかった自責の念が交錯しているようだ。」と結ばれていた。たしかに、自分も大学入局時代はほとんど家に帰らなかったように思います。よく「母子家庭」といわれていました。このようなモーレツ社員が本年は約300万人の退職者となるそうである。

昨年11月22日「いい夫婦の日」の日に生命保険関連団体が40～50歳代の既婚男女に、夫のリタイア後に夫婦の時間が増えることについてのアンケートをとられたが、夫の48％が「うれしい」と答えたのに対し妻は27％､「うれしくない」は夫が16％に対し、妻は32％でした。また､「生まれ変わっても今の相手と結婚したい」と肯定したのは、夫41％に対し妻26％、逆に「相手に先立たれた時、人生の楽しみを見つけられるか」では､「見つけられる」は妻65％、夫45％と、妻の現実的適応がしっかりしているのに対し夫は良妻賢母幻想にすがっているとの分析であった。本年4月から退職金・年金の夫婦均等割制度が実施されるようであるが、これに伴って大量の熟年離婚が発生するとか、ゆめゆめ自分はそのカヤの外と胡座をカクベカラズ。巷説・・・・・。

祖父の上湧別訪問



旭川市医師会
旭川がん検診センター　山﨑　知文

内地より
　うつし植えたる樹々仰ぎ
幹なで語る
　伯父の偲ばる

米山の南側、山あいに水田が点在する農村で教職の後、特定郵便局長を勤め上げた祖父は昭和38年の夏満74歳だった。結婚した末娘（小生の叔母）の様子を見に国鉄と連絡船を乗り継ぎ旭川に向かったのだったが、存命していた伯父に会いたいという望み絶ち難く足を延ばし上湧別を訪れた。明治22年生まれ、亡くなる3年前であった。その伯父は明治3年生まれでその年満93歳、翌年の3月に亡くなっている。今のように交通の便の良くない時代を生きていた彼らがその前に会ったのは何時か定かではないが、まさにこの世で最後の別れをするための旅だったと言える。

私が大学に入り北海道へ来たのは昭和41年で既に40年余の月日が経ってしまい、年齢も－“まだまだ”ではなく“もう”だと思うが－還暦を迎えることになった。普段から私には勉学のことや将来のことなどほとんど問わなかった祖父が、大学の合格を非常に喜んでくれたことを思い出す。私は4月にまだ雪のちらつく札幌に来たが同じ年の6月に祖父は逝ってしまった。その後家族や親戚の者から聞いてはいたが、上湧別やその伯父のことを祖父自らの口から聞いた記憶は残っていない。そして学生時代も卒業後も上湧別とは無縁の年月を過ごし、出張の際も素通りするばかりであった。

10年ほど前ある秋の夕暮れ、直線の続く国道242号線で薄暗くなってきた上湧別の街を通り抜けている時であった。後ろの座席に乗っていた母が「あれ、何だろかね。銅像みたいだね。」と声をかけた。実家の父母が当時私の住んでいた釧路を訪れ、私たち夫婦と計4人、車でサロマ湖、能取湖などを廻っていた。車を止め平屋の養護施設のような建物の敷地に入ってみると久美愛病院跡の碑がある木立に囲まれた一角に高い台座の上にちょこんと石像が立っていた。チョビ髭で丸眼鏡をかけた丸顔の老人でニッカーボッカーのような出で立ちであった（乗馬ズボンとのことである）。夕闇の中で刻してある文字を読んだ父が「これこれ、お祖父ちゃんの伯父さんさ」と言い、「本当にね、眼鏡かけて小柄でちんちくりんとして越後の人だこてね」と母が言った。全くの偶然であった。もしあの時母が気付かなかったら私がこの“庄田萬里”翁の像に出会うことなど無く、翁のことも知らないままだったと思う。

6年前父は、33回忌はその2年前に済んでいたが、祖父が書き綴り和紙に清書してあった短歌などを印刷・製本し我々に送ってきた。それには祖父の幼少の頃近くに朱鷺が来ていたことや、前述の小生の大学合格を喜んだことなどと共に上湧別を訪れたことも記されていた。健康状態が不安になっていた74歳の祖父が今なお矍鑠とした93歳の萬里伯父に「そんな気弱なことでいけない、元気を出し頑張れ！」と励まされたようだと父は話している。冒頭の歌の他に以下のような記述もある。

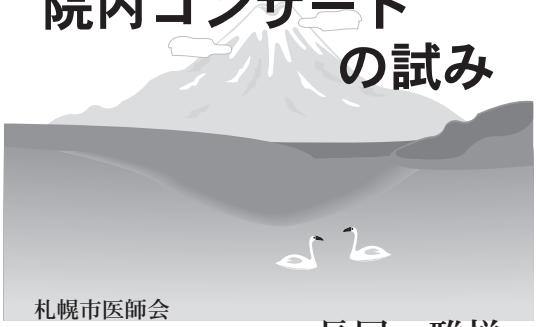
おくり出て
　猶いつまでもわがうしろ
見守る伯父の
　動かぬ姿
昭和三十八年八月十九日北海道の上湧別庄田万里伯父九十六才を訪ねた
　木立茂り鳥の声々　宅地内の椎茸のほた
　外苑の林檎園
　それらをへだてて先は　広々とした水田
　黄金色の稲穂豊に
二十日午前上湧別神社付近を散歩した
　屯田兵開拓の当時を偲んだ
　－後略－

旭川へ来てからは日帰りも容易になりチューリップを見に行く際などにも立ち寄り石像に挨拶をしてくる。初回の時は薄暗くてうまく写真が撮れなかったがその後はちゃんと撮って叔母などに配った。

祖父の当時の年齢まであと14年、私の伯父

たちは全員すでに鬼籍に入ってしまっているので会うのはあの世になる。庄田翁の年齢までは33年、それまで元気でいたら今は本州にいる甥や姪が北海道まで会いに来てくれるだろうか。会いに来てもらう価値のある人間になっているだろうか。

院内コンサートの試み



札幌市医師会
国立病院機構
西札幌病院
長尾　雅悦

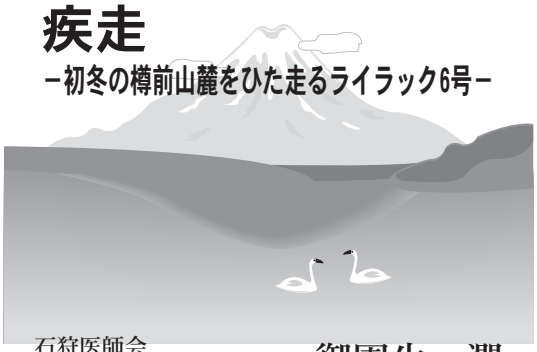
音楽の趣味が高じると自分で弾いたり聞いたりだけでは気が済まず、演奏会を企画しようとするのは誰しもが辿る道筋です。実現には周囲の理解と協力がなければ不可能ですが、幸いにも病院長をはじめ後押ししてくれる人々、院外からも演奏に参加してくれる楽人に恵まれました。西札幌病院で初めての試みとなった『納涼　院内コンサート』(地域医療連携室主催公演) を、2005年8月24日に山の手養護学校体育館で開催しました。『華麗なトランペットの響きとともに夏の夕べを過ごしましょう』というタイトルのもと、演奏とお話を札幌交響楽団トランペット奏者　佐藤　誠氏にお願いいたしました。佐藤氏は1986年より札響で活躍されていますが、東京芸術大学の学生時代より病院を定期的に訪問しコンサートをされていて、この院内コンサートでも積極的に御指導いただきました。ヘンデル、バッハ、モーツアルトなどのクラシックからディズニーメドレーや久石　譲の『Summer』などポピュラーな音楽まで、多彩な音色とテクニックを聞かせていただきました。当日は、私を含め医師や関係者も弦楽四重奏やピアノ伴奏で参加し、入院中の患者様や近隣から大勢の方々にお出でいただき大変楽しい演奏会となりました。最後は聴衆の皆様と『涙そうそう』の大合唱で幕を閉じました。

この『納涼　院内コンサート』が大変好評で『次は？』という声を耳にしておりました。そこで第2回として、クリスマスコンサートを2005年12月14日開催いたしました。『クリスマスの調べ』というテーマで、演奏を札幌医大室内楽合奏団 (学生31名) にお願いしました。さらに8月に出演いただいた札響トランペット奏者　佐藤　誠氏が当日急遽来てくださり、合奏団とのジョイントコンサートで華やかな音色を聞かせていただきました。室内楽合奏団は札幌医大の学生サークルの一つで年1回のキタラでの定期演奏会 (昨年は武満、芥川、スークの難曲に挑戦) の他に、札幌医大付属病院でのクリスマスコンサートを開催しております。アマチュアで技術的に稚拙な部分が多いのですが、そこは若さと音楽へのひたむきな情熱を示すことでカバーしていたように思います。短時間のリハーサルにも関わらず、佐藤　誠先生の指導の効果が本番によく現れておりました。プログラムは宮崎アニメの話題作『ハウルの動く城』のテーマ音楽で始まり、クリスマスメドレー、バッハやヴィヴァルディの作品そしてラデツキーマーチと最後まで楽しい雰囲気の中での演奏会となりました。夕刻の寒い中を入院中の患者様や近隣のたくさんの方々にお出でいただき、間近で聴衆の皆様の反応を感じながら演奏した学生たちにとっても大変感銘の深い経験になったようです。患者様や地域住民の方々と職員一同の音楽を通じた触れ合いの場となりました。

昨年も院内コンサートを2回（8月と12月）開催することができ病院行事として定着、演奏者聴衆とも多彩な人々が参加するようになってきました。そしてその勢いを借り、前述の札幌医大室内楽合奏団出身者によるＯＢ合奏団第1回演奏会も無事終了することができました。さて今年はどんな音楽シーンを作ろうか？と思案の日々です。

疾走

－初冬の樽前山麓をひた走るライラック6号－



石狩医師会
御園生　潤

781系電車を運用したＬ特急ライラックは旭川～札幌～室蘭をピストン輸送し、当時すでに開業していた千歳空港駅（現南千歳駅）の空港利用客の輸送に活躍していた列車である。上下各8往復の設定。札幌～千歳空港駅間の特急・自由席利用可の「エアポートシャトルキップ（900円）」など懐かしむ方も多かろう。現在では、15分ヘッドで新千歳空港駅へ地下トンネルで乗り入れる「快速エアポート」に座を譲り、この列車も、札幌～室蘭間の「すずらん」と特急名も改称されたが、今も上下4往復が健在である。塗装色も、国鉄色から白／うす紫へと変更になり、ヘッドマークも、その名の通り、「すずらん」へと改称されたが、「汽笛一声新橋の～」のおなじみの放送チャイムは今も使用されている。

肌色／赤色の旧塗装色の国鉄時代のライラックに樽前山、社台の牧場の冬景色とＳＬ時代から鉄道写真の名所であったこの周囲も、今も鉄道写真のファンたちにより夜行寝台列車、振り子特急等の撮影スポットとして愛されている。私が医学部2年時の撮影であるこの写真も若き日の思い出となってしまった。ちなみに、室蘭本線の社台～沼ノ端間は、在来国鉄（ＪＲ）線の日本一直線区間（28.7㎞）である。どこまでも続く直線線路を疾走する列車の姿が快感でもある。

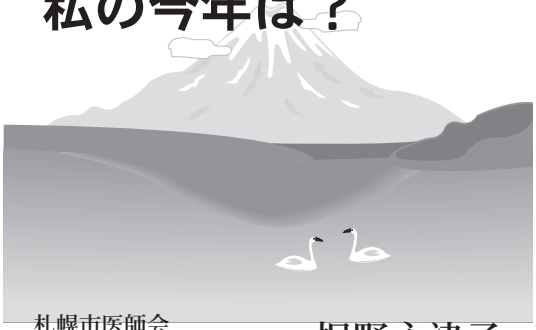
○

猪年生まれとして執筆に応募させて頂いたが、私の北海道医師会入会は平成7年4月。早いもので、12年を迎えようとしている。この間、公私、内外ともに様々な出来事があったが今後の12年間は一体どのような時代になるのであろうか。途中空白時期が存在しつつも長いお付き合いをさせて頂いている現勤務先病院で、病院長らと昼食の食卓を囲む時、「一体どんな時代になるのでしょうね」と語り合う日々である。

2007年が、会員諸氏にとって、実り多い年になることを祈念しつつ、この「医療逆風」の時代の新春のご挨拶とさせていただきました。

ライラック6号(1006M)　国鉄室蘭本線　社台～白老間
S57(1982)12.21　著者撮影

私の今年は？

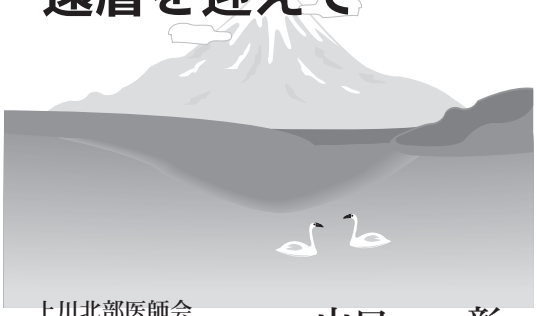


札幌市医師会
藤野眼科クリニック
梶野永津子

私の今年は？　長年夫と経営しておりました、札幌パーク病院を現在休院しております。諸事情のためとはいえ、大変残念です。もう1度再開したいのですが、条件が整っていません。私だけ、以前経営しておりました藤野眼科クリニックを10月30日より再開しております。

今年は、変化の年となりそうです。未知数の先の見えない現在ですが、ピンチをチャンスと考えて、進んでいきます。心こそ大切なれとの私の師匠である創価学会名誉会長の池田大作先生の御指導どおり、今年もがんばります。皆様のご多幸をお祈りいたしております。

還暦を迎えて



上川北部医師会
山口医院
山口　　彰

平成7年80歳で亡くなった父の還暦は、私たち夫婦と孫、新婚間もない妹夫婦、そして弟と、とある温泉で祝った。

チャンチャンコは嫌だというので赤いベストを着せたと思う。

なぜか父は余り嬉しそうではないようだし、隣の母もまだ52歳ということもあって祝いごととは無関係のような顔をしていた。

40代で肺切の大病をした（この7年後には胃切も受けた）父は、この頃は比較的元気で小旅行はよくしていた。

それから32年、私が今年妻と共に還暦を迎えようとしているが、我が身となると老人扱いは嫌だ、まだまだ若いと思ってしまう。

父の気持ちが少し分ったような気がする。

例え12月に孫が生まれようとも。

この14年、病気休診は一度も無く、身内からは少し休めと言われているが、認定医を維持するための学会出張で年に3、4日は休むのでそれを休暇に充てている。

37歳で病身の祖父の跡を継いで2代目を開業した父は、検査、処方も必要なものだけという考えで、垣間見るに点数は少ないな、高額所得にはほど遠い存在と思っていたが、亡くなった後、ある程度の財産は残してくれていた。

だからこそ、わずかな設備投資のみで3代目を継ぎ、借金が無いので現在の厳しい医療情勢の中、年々減っていく診療報酬でも細々と医業を続けられるのだと思っている。

当然現在の所得は勤務医の頃には遠く及ばない。

苫小牧での勤務医時代、近隣の町村から朝早くに通院してくる高齢の患者さんを見て、地元でできるだけの医療を行い、何とか患者さんの負担を軽くできないかという思いが3代目を継ぐ決心をさせた。

ノスタルジアでしょうと言われたが、それだけでは都会を離れる理由としては弱過ぎる。

父の病気の悪化も後押しさせたが。

誤算は人口の減少の速さが予想以上であったことである。

今では私が中2でこの町を離れた45年前の27％の人口になってしまった。

まさに過疎の真っ直中で、医療行政の厳しさに耐えているが、先が見えてきたような気がしてきた。

医師会はとっくの昔に抵抗勢力ではなくなってしまった。

かつては患者さんのためと思ってやってきた医療が、現在の情勢にそぐわないということで、あれもこれもできなくなってしまうような気がしている。

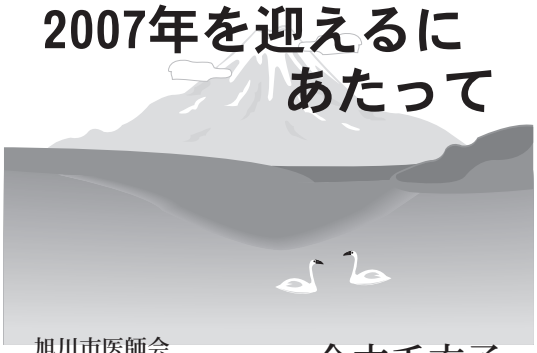
誰のための医療か、34年間良かれと思ってやっていたことがそうではなくなりつつある。

昨夏20代中心の集まりに参加したとき、この人たちはまだ人生の4分の1しか生きていないのだ、それに引き換えて自分には4分の1しか残っていないことに気付き、愕然としてしまった。

団塊の世代でありながら幸いなことに定年は無い立場ゆえ、病気をしなければそこそこの生活はしていけそうだ。

医者の不養生、紺屋の白袴とよく言うが、これからの20年は勿論健康には最大の注意を払い、悔いの無い人生をいかにして送るかを考えながら、医業を続けたい。

2007年を迎えるにあたって



旭川市医師会
今本内科医院
今本千衣子

住み慣れた札幌を出て入学した旭川医大を卒業し、流れのままに結婚、そして初期研修を旭川医大第一内科、道北病院で修め、旭川保健所勤務を経て長男の出産を機に勤務医としての職を辞し、今は亡き義父を師匠とする私の開業医生活は、スタートから今年で20年たちました。自由奔放に生きてきた24年間と比べ、その後の24年間は、あまりに対照的でありコペルニクス的転回といってもよい変化でした。夫の祖母を含め4世代同居の大家族生活は、転勤族核家族で育った自分には、ほとんどカルチャーショックに近いものがありました。

昭和34年のちょうど私が生まれた年に、当地で開業した義父は、プライマリケアに医師としての生涯を捧げた私の見事なお手本でありました。

祖母を義母と共に送り、また、義父を平成8年に膵癌手術を経て最期は在宅で看取り、平成13年に同じ病で後を追うように義母も旅立ちました。そして長男、二男が進学のために東京、横浜へと旅立ち気がつくと、いつの間にか8人の大家族が娘と夫の3人家族になっていました。この環境の変化と時の流れは、やはり自分には大きな転機となりました。

これから後半戦どんな生き方をしようと思い悩んでいた時、九州大学を卒業された 精神科医の神田橋條治先生の著書に触れる機会がありました。心の養生のコツ“気持ちがいい”を信じなさいという一文に出会いました。

目から鱗が落ちるような驚きでした。それまでの自分はいつもいつも“ｈａｖｅ ｔｏ－－－”が優先されて生きてきたからです。

“気持ちがいい”という感じをつかんでそれを羅針盤として進みなさいとありました。

それまでの自分の人生は“ーーしたい”より“ーーすべき”という方針そのものできたなと、自分の欲求に沿うよりは周囲の助言や命令、価値観に沿って生きてきたと。そういう生き方に限界を感じてきたところだっただけに、神田橋先生の言葉はすーっと胸にしみ込んでいく暖かな心地よさがありました。

自分のために自分が使える時間が本当に久しぶりにできたことが幸いでした。当たり前なようですが、なかなか生活人にはそれができません。人生の折り返し点を過ぎ、後半戦、今度こそ自分の本当にやりたいことを心おきなくをやってみようと考え直して昨年のお正月を迎えました。

そんなわけで、昨年の元旦には自分でいくつかの目標をたてました。

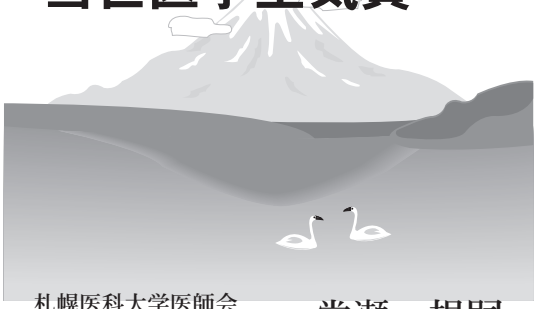
一つ目は産業医初期研修を終えることでした。これはハードルは低く昨年の秋に申請可能となり、一安心です。

二つ目は自分が行ったことのない土地を一人で気ままに訪れることでした。二月に『糖尿病学の進歩』に出席する傍ら、かねてからの憧れの金沢を訪れることができました。兼六園、東のお茶屋、室生犀星や泉鏡花の文学の足跡にも魅せられ、小京都と呼ばれる金沢の歴史と文化にわずかでも触れたことは、とても心豊かで素敵な時間の流れでした。

三つ目はピアノで自分の好きな曲を演奏会で弾くことでした。リストの“愛の夢”、この曲をあんなこともあった、こんなこともあったと回想しつつ4月に大雪クリスタルホールで弾くことができたのも楽しい時間でした。今年は新境地の印象派か、はたまたラフマニノフか検討しているところです。

四つ目は、自分が学生時代から興味を持ち続けてきた精神科分野をきちんと学びたいというものでした。いろいろと試行錯誤を繰り返しましたが、患者さんの紹介を通し多くの示唆を与えてくださった旭川赤十字病院精神科のＦ先生の導きで札幌医大の神経精神科の臨床登録医にさせて頂き、昨年末は初めて道北地区の精神科医の先生たちと時間を共有できたことは何よりも喜びでした。柔軟に無理なく、“心と体”この不可分なものに医療人として真摯に関わっていきたい猪年の今年です。

当世医学生気質



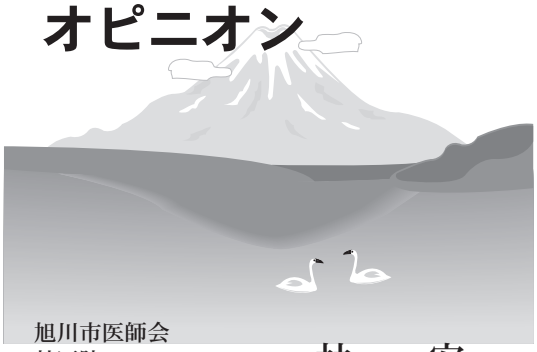
札幌医科大学医師会
医学部長　當瀬　規嗣

学生は講義に出ないのが当たり前だった。少なくとも私の学生時代はそうだった。私の学生時代には、すでに出席管理が当たり前になっていて、3分の2の出席を満たさないと、教授に多大なご迷惑をかけることになっていた。だから、配られる「出席カード」をいかに“不正”に入手するか、同級生の間であらゆる工夫が弄された。もちろん、私もその一員である。それでも、講堂内には一定の秩序があった。講堂内は教授の声が大きく響くだけで、私語はきわめて低く、手短に行われた。出席取りのためだけに講堂にいる我々は、真剣に講義を聞いている仲間の邪魔をしないことは、不文律であった。それでも教授の逆鱗に触れて退出を命じられた仲間もいた。学年が進むと、そういった不真面目な仲間の中で、突然目覚めて、勉強を始めるものも出た。そういう仲間はすべての講義に出席し、熱心にノートを取っていた。「あいつが？」とただ驚くばかりであったが、その眼は真剣そのものだったように記憶している。ちなみに、私も一時期目覚めようと計ったことがあったが、仲間の強い引き止めもあって、すぐに、普段の落ち着いた生活に戻ってしまった。学生時代の懐かしい思い出である。

さて、立場が変わって、教壇から眺めたいまの医学生の様子はかなり異なっている。出席管理のためか、出席率はかなり良好である。しかし、これが真剣に講義を聞くという雰囲気がない。なんとなく、漫然と聞き流している感じがするのだ。前のほうに座っている積極的と思われる学生たちも、配布資料を手に入れると安心するのか、あまり手を動かさない。それでも授業のはじめのころは、聞こうとしているのがわかる学生も散見するが、だんだん生気が失せてくる。集中力に欠けているのだ。本学の講義は昔ながらの90分ではなく、60分なのだが持たないのである。「お前の講義が面白くないからだ」といわれれば、二の句が継げないが…。講義にあまり興味がない後ろの学生は、ほって置くと私語に余念がない。2〜3語をこそこそというのでなく本格的な会話である。勢い声も大きくなってくる。これでは、周りの学生が講義を聞き取れない。でも、周りも注意をする風でもない。話をするなら、出席カード配りの秘書が来るまで廊下にいるぐらいの配慮があったっていい。ジュースやお茶を飲むのは全く当たり前になってしまっている。携帯の音も聞こえる。というわけで、気の短い私は、年に数回のカミナリを落とす羽目になる。叱られると、はじめはキョトンとしているから始末が悪い。ただ、素直なのが救いではあるが。

最近の若者は周りに対する気遣い、配慮をすることができない者が多い。一方で、物事に対する集中力を欠いているといわれる。厳しいはずの受験を切り抜けてきた医学生も全く同じである。しかし、周りへの配慮や集中力は医師にとって極めて基本的で必要不可欠な資質ではないのだろうか。この駄文をご覧になっている先輩諸氏は同意してくださるはずだ。教育に携わるものとして、今後一層の努力が必要なのは十分にわかっているが、果たして…。彼らが研修医として世に出るころ、先輩諸氏に多大なご迷惑をかけるのではないのかと心中穏やかではない。ましてや患者様に迷惑をかけては話にならない。いまは、昔にも増して医師の倫理や社会的責任が強く意識され問われている時代である。今後の医学部は義務教育のような人間教育をしなければならないのであろうか？そう、昨日も1年生の講義で怒気を含んだ言葉で叱咤したばかりだ。新春に似つかわしくないお話で恐縮だが、優秀といわれる医学生の現状を正直にお話しして、警鐘を鳴らすこととした。

オピニオン



旭川市医師会
林医院　林　宏一

年男として、丁度還暦にあたり巷では団塊の世代とも言われ、我々世代の大量の退職が職場構成人員の歪を作るなどと新聞紙上ではたびたび取り上げられている。医療の世界ではどうであろうか、世間に疎い私にとってそのような難しい事は皆目分からない。それよりも既に巷間の顕著な現象として、新卒医師の卒後研修制度に起因する旧態医局制度の中の一部機能の維持不能が、結果として医局員の大学病院への引き上げを招き、恰も医師不足状態による地域医療制度崩壊が急激に起こったかのように報じられ、社会不安に油を注いでいる。たしかに道内自治体病院では現在までの診療科目を維持できず休診状態の科もあるやに報じられ、ＮＨＫの番組にも登場している。

私事で恐縮ですが今春医師国家試験を受験予定の息子もマッチングなんとかで医大を離れそうな雲行きである。同業先輩の親として、的確なアドバイスができない程の世間の変革は、ただただ自分の生物学的年齢だけでなく、社会的にもそろそろ潮時かなとも思わされている。一日も早い子どもの成長を儚くも願っている。

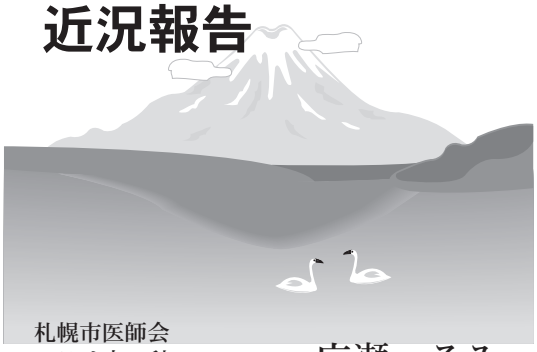
ところで、“日医ニュース”にオピニオンとして各界有識者からの提言をいただく紙面がある。11月5日発行号に朝日新聞論説委員の梶本章氏の医療行政や日医への貴重な御意見が寄稿されていた。彼は冒頭“赤ひげ”という言葉を、こんな医師がいればいいのに、という医師の理想像として世間では用いていると述べている。また驚いたことに私自身は直接目を通していないが京大教授の橘木俊詔氏が“日本のお金持ち研究”で医師は日本において経営者層とともに高所得者の代表選手と分析しているとの一節を引用している。

いやはや“赤ひげ”とは、医者の自己犠牲で時間も財産も投げ出し、地域医療に日夜邁進し、結果として理想の医師像として尊敬される。そのボランティア精神を否定するつもりは私とて全くない。しかし息子に“赤ひげ”の精神論を伝えたいとは、微塵だに思わない。また医師の金持ち論は論外である。

梶本氏は産科医や小児科医の問題にも触れ、“いくら国民皆保険制度の仕組みがあっても、医師がいなければ絵に描いた餅だ”・・生命にかかわる深刻な問題ととらえ、考え得る限りの手立てを講じなければいけないと説いている。その通りである。早急な手立てが必要であることに異論は無い。しかしである、これらの解決策に“赤ひげ精神論”をこれっぽちでも封入させては根本解決策を曲解させてしまう。彼が例えばと述べた解決策に、医療費を開業医より病院に手厚く配分する＝過激な勤務に耐えかねた病院の医師が開業医へ流出するのを止める。なにおか況やである。過激な勤務に耐えかねて開業している訳ではない。経営も含めた全ての責任が自分にある開業医の方が、百倍も過激な勤務である。また自由開業制や自由標榜制を見直す＝強制的に必要な医師が確保できると。だんだん開いた口が閉じなくなってきた。あまりの驚きである。医者の世界で“科”を選ぶということの重大さを全く理解していない発言である。これは口角泡を飛ばしここで述べても素人の論説委員には到底理解できるはずも無い。

介護保険事業に携わっていると、監査とか第三者評価とか、煩わしい限りである。今日までの医療業界で我々に最も欠けていたことは公務員精神である。“医は仁術”の基に限りない自己犠牲と病に立ち向かう潔癖症とも言える日本医療が、結果として世界最長寿命を勝ち取ってきたのである。これからは、労働基準法を遵守し、医師のワークシュアリングを行い医師の過労死などという不名誉な結果を決して招いてはいけない。やはり“赤ひげ”より“ブラックジャック”を目指して日夜研鑽すべき。これが私のオピニオンです。

近況報告



札幌市医師会
ひろせ皮フ科
クリニック
広瀬　るみ

私は現在、東区の栄町で、昭和63年8月から皮膚科を開業しています。40才の時に男児を出産して、現在は7才になる息子がいます。母親としては息子の成長を見ているのが何より嬉しく、父親も五十代半ばで、祖母は80才で、年寄り夫婦（ちょっと言い過ぎ？）と老人が子どもを育てているといった風です。息子の様子を書くことが近況報告として最もふさわしいように思います。

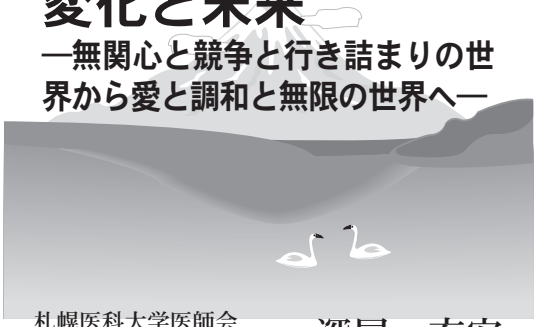
普段は仕事をして、スーパーで買物をしてから帰宅しますが、時に研究会や講演会に出かけて帰宅が9時過ぎになると息子は泣き出します。息子は父親と母親が両方揃わないと駄目な様子で、朝、帰宅時間を告げてそれから30分も過ぎれば泣いてしまいます。一人息子で『箱入り娘』のように大事にされてきたので、まだ一人で留守番もできません。という訳で、私は自分の母親から携帯を持つように勧められています（未だに持っていない）。

息子は今年4月に近在の小学校に入学して、1年1組にお世話になっております。一歩、学校に足を踏み入れると、靴箱がずらりと並び、そこは懐かしい昔からの小学校そのものです。学校の先生たちも温かい人柄を感じさせる容姿の方々で、子どもを安心して預けております。参観日に教室を訪問した折には、担任の先生が教壇の前に立って「みんな、わかったかい？」と子どもたちに大声で話しかけています。教える先生の様子は私が40年前に受けた教育とまったく同じですが、変わったのは生徒たちの様子です。子どもたちの服装、持ち物、ランドセルがファッション化しており、例えばランドセルも様々な色が使われています。ランドセルが赤と黒しかなく、入学式もほとんどカーディガンかセーターを着て着飾る子どもが誰もいなかった時代に育った私のような人間から見ると、華美に過ぎるように思います。学校も子どもたちの服装までは規制できにくいでしょうが、親の方も余り華美にならないように身の周りを整えたら良いのにと思います。

息子のことで最近感動したのは、美術館賞を頂いたことです。参観日に出掛けた時の話です。教室に入ると息子も含めて小学生たちがクレヨンを握って一生懸命、机に向かって何か描いています。息子の側に行って覗いてみると画題は『運動会の玉入れ』です。大勢の子どもたちが群集となって玉を籠に向けて投げ入れている様子が描かれています。息子の絵を見ると一瞬「上手だな」と思いましたが、周りの子どもたちも上手く描いている様子で、息子の絵が特別とも思いませんでした。

数日後、学校の担任の先生から電話で、息子の絵がMOA美術館児童作品展（東区展）で美術館奨励賞を授与されて、平成18年10月17日（土曜日）、モエレ沼公園内のガラスのピラミッドで表彰式があります、と伝えられました。当日、診療が長引いてピラミッドに到着した時には、午後1時30分から始まる表彰式は既に始まっていました。「一番位の高い賞の人がようやく来ましたよ」。受付の方がそう言われたのでちょっとびっくりしました。息子の奨励賞は最初に授与されるはずだったのですが、最後に順が変わっていました。金賞、銀賞ほとんどが5・6年生で占められていたのですが、『MOA美術館奨励賞』と読み上げられて前に出ていったのがまだ背の低いあどけない子どもだったので、居合わせた人たちは驚いている様子でした。赤ん坊の頃から子どもを育ててきて、幼稚園の頃には、「この子は一体、何に秀でているのだろう？」と思いました。いつも落書き帳に虫や車の形を書き散らしていたのがデッサン力を養っていたのでしょうか？そういえばテレビで本物の戦艦ヤマトの映像を見た後に、その形を紙に何枚か描いていたことがあります。祖母がそれを見て「この子の船の絵、上手だよ。戦艦の細かい部分までよく見て書いているよ」と言っていたのを思い出します。今後も勉強だけでなく、好きなことを見つけてのびのびと成長して欲しいです。

変化と未来
―無関心と競争と行き詰まりの世界から愛と調和と無限の世界へ―



札幌医科大学医師会
第一生理学
深尾　充宏

医師・研究者としての仕事を始めてから、早や20年になる。いろいろなことを経験した。ただひたすらに診療をこなす日々から、アカデミックな研究の世界に至るまで。そして、最近つくづく思うことは、進化の難しさということである。特に、どちらの方向に走って行けばいいのかということが気にかかる。現代科学を見るに、確かに進歩している。世の中は非常に豊かになった。恐らく、正しい方向に進んでいるのであろう。

しかし、一方、この世の中の行き詰まり感も非常に気になる。医学面で見ても、様々な遺伝子の解析、病態の解明、先進医療などめざましい進歩を遂げている。それにもかかわらず、病人は増え続けるばかりで、病気も治らない。雑用も増える一方である。この状況は、日常、身を粉にして働いている医療スタッフにとっては酷な話である。本当に医学は正しい方向に進んでいるのであろうか？

ある結果には必ずその原因が存在する。患者さんは、ほとんど、悪い原因を行った末の悪い結果としての病気を持って来院する。医師はその結果に対して処置をして、悪い原因を正すように指導する。しかし、患者さんの多くは、よく理解せず、薬を飲んで解決したと勘違いして、原因を改めようとしない。そしてまた来院する。これを延々と繰り返す。原因が直っていないのだから結果は直らない。体は、摂取した食物から作られる。しかし、この食物は、様々な化学物質に汚染され、品種改良（改悪）された本来の生命力を失ったものが食卓にあがる。これを食べて作られた体は健康にはなり得ない。また、人間は、解剖学的に肉食ではないと思われるが、今日では必要以上の肉を摂取し、病気の原因となっている。肉食を控えると、その飼料となっていた穀物にゆとりができ、世界の飢餓問題、環境問題、動物愛護問題がかなり改善され、医療費も激減するであろう。しかし、現実はそうとはならない。今日の栄養学もかなり怪しい。自然の動物はかなりの偏食であるが、健康である。土からの医療という本を学生時代に読んだが、今になっても、その正しさが身にしみる。

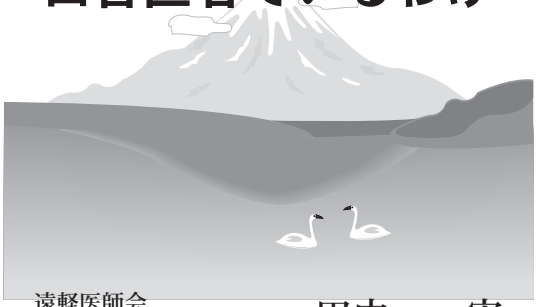
また、心の病を抱えている人も多い。自殺する人は年間3万人を超えている。教育問題も行き詰まり、学校は荒廃し、先生方も疲弊している。皆、一生懸命走っているのになぜなんだろう。走っている方向は本当にこれでいいのであろうか？

最近、銭金という番組をよく見る。これを見ていて不思議に感じることは、貧乏なのに皆、明るいということである。見ていて楽しい。笑顔もいい。今日の物質文明を捨ててしまったような人たちであるが、ここにはなぜか平和で明るい世界がある。また、最近、自然と共に調和して暮らすことを選択する人も増えてきている。これは、現代文明の一種の進化か、あるいは競争社会に敗れた結果を見ているだけなのか？もう一つ見ているテレビはオーラの泉。不思議だが本当のような気がする。我々が一生懸命やっているあらゆることが根底からゆらぎ茶番となる可能性がある。

現代は、あらゆる面で転換期にさしかかっていると思われる。どちらの方向に走っていくのか？それは、本人に与えられた自由である。何が善し悪しかの判断は、本人でも難しいであろうし、まして、他人に分かろうはずもない。ただ、今後の世界の向かう方向性としては、“物”中心の世界から、“心”さらには

“魂”中心の調和のとれた世界へ、愛のある平和な世界へと向かっていくと思われる。いろいろな問題はあると思うが、大局的に見ると、紆余曲折しながらも明るい未来に向かって行くのであろう。やはり、楽観的に楽しんで生きていくのが良いようだ。

田舎医者でいるわけ



遠軽医師会
遠軽共立病院
田中　実

医師になって23年、生まれ育った地元に戻り16年目となる。地元で医療を続けているのは、昔から住み慣れた環境が気に入っているからなのだが、他にも理由がある。

私自身は4回目の年男となるが、病院から車で10分ほどの所に住む母、そのすぐ隣に住む祖母（母の母）も亥年である。96歳となる祖母は持病もあり時折ピント外れのことを話すが、丹誠込めた自慢の花畑は健在で、夏はもちろん冬であってもビニールハウス内で育てた花と会話しながら散歩するのが日課となっている。

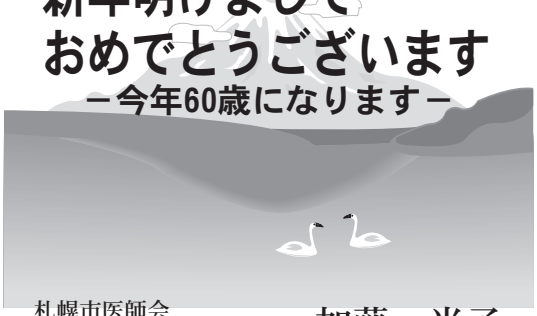
一方、母親は68歳で自動車学校へ通い運転免許を所得した。私の父が半身麻痺となりリハビリも兼ねて通院が必要となったからだ。当時、通院には嫁（私の妻）が運転手となっていたが、このままでは嫁に迷惑がかかると一念発起しての行動である。当然父や私はこの年では危険が大きいと反対したが、当の本人は言うことを聞く耳などなし。どうせ合格するはずもないだろうから、本人が納得するまでやらせようとなったが、予想に反し合格してしまった。息子でさえもが驚いた意地と根性には敬服してしまう。心許ない母の運転であるが、父や祖母を乗せての通院はちょうどよいドライブコースとなっている。親の近くに住むことが親孝行だと考えると、これが田舎医者でいる理由の一つである。

さて、私が医師を志した理由は、子どもの頃みた地元医師の姿にある。自宅で寝たきりでいた祖父の往診にスクーターできてくれた診療所の先生、母親が入院していた外科医院の院長先生など、患者さんや家族への思いやりを持った医師への憧れからだ。地元の医療を守ることはもちろん、私の姿をみた子どもたちの中に医師を志す子が出てくれることで、自分を育ててくれた地元への恩返しをすること、これも田舎医者でいる理由の一つである。

ところで、直接私をこの地へ呼び戻したのは、故菊地保成先生である。小学生の頃前頭部を窓の角にぶつけ縫合してもらったのだが、休診にもかかわらず先生はすぐに診に来てくれて、「目玉でなくて良かった」と笑いながら縫合してくれた。わざわざ治療に来てくれたことには感謝したが、自分がこんなに痛い思いをしているのに、笑いながら治療するとはとんでもない話で、こんな医者にだけは二度とかかるものかと子どもながらに思った。その菊地先生の下で働きだしたのだから「縁」というものは不思議なものである。ふと今の自分を振り返ると、場所によっては「こんな傷で済んで良かったね」などとニコニコしながら縫合しているではないか。きっとあの子はこんな医者にだけは診てもらいたくないと思っただろう。反省はしながらも、こんなことをきっかけに将来医師になって地元に戻ってきてくれないかと密かな期待を胸に毎日の診療を続けている。

地元への恩返しはまだ始まったばかりで、いくら制度が変わってもこの地での医療は継続していかなければならないのだから。

新年明けまして おめでとうございます
－今年60歳になります－



札幌市医師会
北海道社会保険病院
加藤　光子

札幌医大皮膚科の助手になったので、すぐに、住宅資金を借金して、昭和53年11月に札幌市南区藤野に、私はわが家を新築しました。当時は父が存命しており、父から土地を購入した次第です。

3年ばかり私はそこから大学に通勤しましたが旭川に転勤しました。その後両親がその家に住んでいました。畑を耕したり、ゲートボールをしたりと年寄りには最適な環境だったと思います。やがて父も亡くなり、数年後に母が旭川で私と同居するようになりました。それから10年ばかりの間マイホームも荒城の廃屋となっていました。

私が、札幌に転勤できたので、一大決心をして、平成17年夏からリフォームをすることにしました。その年の10月末には完成しました。

廃棄物処理業者のトラックで4台、人夫4人でとりあえず家のなかの荷物を一度に処分、いちいちより分けている暇もありませんでした。傾いていた塀も壊して、新しく作りました。キッチン、風呂、トイレその他、とても快適な住まいへと変わりました。

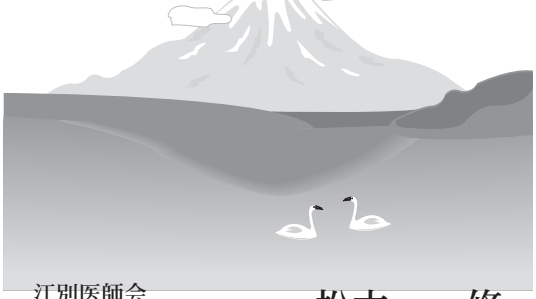
伏古の末の妹一家が平成18年10月に転居して、今ようやく入居者が現れました。

妹の長男が11月9日の最終合格発表で司法試験に合格、明るい新年を迎えることができます。試験勉強で北大図書館に通う都合上、引越しするわけにはいかなかったのです。約1年空き家でした。

90歳の母が脳梗塞で倒れたのは、リフォームが完成した家を見に行き、小金湯温泉で遊んで帰ってきてから、およそ2週間後のことでした。元気なうちに、かつて15年ほど自分が住んでおり、今や全く新しく変身した家を見せることができて良かったと思います。

加藤家の墓は藤野聖山園の山の上にあって、藤野の家から近いので、お盆には姉妹たちそれぞれに立ち寄ることができます。チャンスがあって良かったです。

「おやじクラブ」



江別医師会
江別市立病院
松本　　修

医師会の方から、年男に当たるので何か原稿を書いてね、との依頼あり。宝くじや懸賞には全く当たらないのに・・・。

今年で48歳。自分も完全なおやじになってしまったものだ。おやじといえば、一人息子が通う幼稚園に「おやじクラブ」というものがある。「おやじクラブ」とは、在籍する児童がいる、という繋がりだけの父親が、園の行事にでしゃばり、そして独自の企画で子どもたちと遊ぼうと作られた会で、父親同士の交流によって親バカぶり、悩み、教育論等他では話すことのできない話題などを肴に、楽しい会合を行おうというものである。この歳で入るのも何か浮いた感じで嫌だよなぁ、と思っていると、カミさんが「あなた！入会手続きしておいたから」「え？はい・・・」

入会手続きが済むと、「OYAJI CLUB」とロゴの入ったTシャツが送られてきた。行事に参加する時に着用義務があるそうな。サイズは「LL」であった。猪年の体型をしている私は普段「5L」の服を着ている。当然着られません。しかし着用義務がある。どうにか頑張ってトライしてみると、そこには長州小力が立っていた。

4月　総会。いわゆる新人の顔合わせ会である。やはり自分の息子でもおかしくない年齢の「おやじ」が沢山いた。「おやじ」のおやじだから、俺は「じじい」か？と思っている

と、1人同じ位の年齢の「おやじ」がいた。「お達者クラブ」でも一緒に作ろうかと近づき、話しかけると、彼は園長であった。

7月　七夕フェスタ､おやじの店。幼稚園の七夕行事におやじたちが露店を出して盛り上げようというもの。おでん･綿あめ･ヨーヨー釣り・くじ引き等。私は綿あめ屋をやることになった。サイズは大・中・小、色は白・ピンク･オレンジから選べることになっている。「こんなのやったことないからなあ〜」と作り始めてみると、やはり上手くいきません。変な形の綿あめを子どもたちに渡すと、皆、嬉しさのあまり目が潤んでいた。それからは型崩れ物は、私の腹の中に消えていった。これではさらにT シャツが着られなくなるし、赤字になってしまうと、変形綿あめは形が良くなるまで綿あめを巻きつけて、小や中を買いに来た子には、特大のサービスだよ〜と誤魔化していました。お！わが息子が買いに来た。よし！特盛りの大サービスにしてやるぞ！！

「何色がいい？」「あお」

8月　夏のネイチャースクール。廃校になった小学校を借り切り、その校庭にテントを張り、キャンプを行いながら自然体験をしようというもの。周りは田園風景一色。散策に出発。畦道を歩きながらゲンゴロウ･ヤゴ･アメンボ・カエルたちと遭遇する。子どもたちの採集瓶の中はいろいろな生き物たちが。しかしわが息子の瓶には何故かカエルばかりである。そして持ち帰りたいと言う始末。マンション住まいのわが家では飼えるわけもないし、飼いたくもない。「ケロッピが可哀想だから放してあげようね。・・ね！・・ね！！」「わ、わかったぁ〜」と言って、走り去る息子。

夕食はおやじたちの手作りカレーライス。炊き上がりにムラのあるライスに甘口カレー。息子はおいしそうに食べているが、私は「カレーはやっぱり辛口でなくては」と言いつつ、3杯おかわり。

就寝時間。テントの中でおやじと息子2人きり。母がいないためか全く寝ません。子どもたちが寝た後、おやじたちだけでの懇親会あり。テントの外ではすでに何人かのおやじたちが集まり酒盛りをしているようだ。子守唄を歌ってもダメ。大勢集まり宴も酣となっている・・。早く寝ろ！・・・・やっと寝たと思ったら、もう宴会は終わっていた・・。クーラーボックスの中は大量の缶ビール。一缶出してテントの中で一人酒。もう寝るかと灯を消して横になった。な、何だぁ！私の顔の上にベトッとした物体が！灯を点けると殿様ガエルが飛び跳ねていた。「小僧〜！」

10月　秋のゲーム大会。子どもたちと一緒にいろいろな競技をしました。

玉入れ：籠を背負って逃げ回る役に当たった。こんなに走り回るのは学生時代以来か。息が上がってダウン。

綱引き：学生時代、怪力のラガーマンで鳴らした実力を見せてやるぞ！ヨーイ、ドン！ギクッ！こ、こ、腰が・・・。

リレー：俊足のラガーマンで鳴らした実力を見せてやるぜぃ・・・？同僚の整形Drに手術されるのは絶対に嫌なので、十分アキレス腱を伸ばして、いざスタート。ズキッ！太腿の裏が・・・。

その晩、おやじは寝込んだ。

12月　もちつき大会。早朝、幼稚園の厨房におやじたちが集まり､大量のもち米をとぎ､蒸しあげる。さあ、もちつき大会の始まりです。杵は思ったよりも重たく、もちをつくのは結構腰にくる。汗が臼の中に落ちていった。ま、塩味が効いていいか。息子と一緒に杵を持ち上げ記念撮影。大変喜んでいる。やっとのことでもちがつきあがった。汗と涙の結晶のもちを、息子にたらふく食わせてやるぞ！

「おい！どうして全然食べないんだ？」

「だってぼく、もちキライだもん。」

「小僧〜！」

1月　スノーフェスタ。雪像作り。肉体的､精神的にボロボロになったおやじは、冬眠させていただきました。今回はお休み。

こうして「おやじクラブ」の1年は過ぎていった。今年は年男。心気一新して頑張るぞ。それには、体力と減量が一番大事なようである。風呂会員と化しているスポーツクラブに真面目に通い、息子の前でカッコイイところを見せるぞ。おやじも頑張るから、息子よ、お前は夜、早く寝ろ！

Life goes on

空知医師会
砂川市立病院
館農　勝

会員のみなさま、新年おめでとうございます。

本年最初の号となる本誌に、拙稿を掲載していただけるということで大変光栄に思います。3度目の年男ということでこのような機会をいただいたわけですが、私にとって2007年は特別な1年となりそうです。

まず、今年の4月で、医者生活満10周年を迎えようとしています。医者として働き始めた当初は、10年もの臨床経験をもつ先輩医師がとても頼もしく、何でもできる非常に大きな存在に見えていました。早いもので私も医者として10年を経過しようとしていますが、さて自分の臨床能力はというと、まだまだ一人前というには程遠い存在で、連日、様々な訴えで訪れる患者さんを前に、悩み、不安を感じ、先輩や同僚に助けられてどうにかやってきたというところです。アメリカ人による面接でしばしば、「10年後にあなたは何をしていますか？」という質問がありますが、当時、その場しのぎで、かなり格好をつけた返答をしていましたが、実際10年経ってみると、思っていたほど成長していない自分を恥ずかしく思います。

この10年、医学の世界も様々な変化がありましたが、個人的には、新臨床研修制度の導入は大きな出来事であったと思います。現在勤める砂川市立病院は、中空知の基幹病院で、非常に忙しい病院ですが、医学生の研修希望病院として全道トップクラスの人気を誇っており、毎年、熱い思いを抱いた研修医たちが就職してきます。当院では、羨ましいほど充実した研修プログラムが組まれており、自分がここで研修医生活を送っていたら、10年を経た今、全く違う医者人生を歩んでいたのだろうなあと思います。年々、道内の大学病院での研修を希望する研修医が減っているようですが、是非、研修体制の整った当院へますます多くの研修医が来てくれることを願っています。

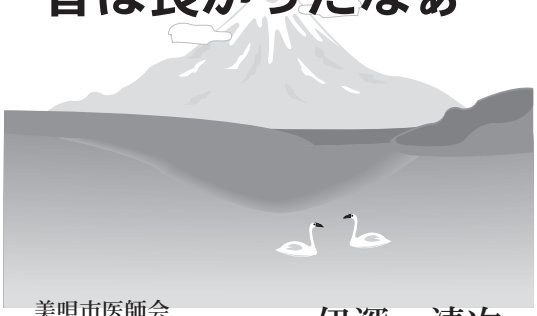
ところで、今年は、私にとって新たな、そしてとても大きなスタートの1年となりそうです。現在、札幌医大・精神神経科と小児科が連携して、札幌医大付属病院での児童思春期の専門外来の開設に向けて準備を進めています。私は、その立ち上げメンバーの一員に加えていただき、昨年来、週に1日半、児童精神科の専門施設で研修をさせていただいております。研修開始前は、同じ精神科領域なのだし、成人も児童もさほど変わりはないだろうと高を括っていたのですが、実際に現場を目にすると、あまりに違う学問であることに驚き、ひどく戸惑いました。年を取るごとに1年が早く感じられますが、とりわけ昨年1年間はあっという間に過ぎました。今春の専門外来開設に向け残された時間は少なく、なんとかスタートダッシュで躓かないよう、残りの研修期間を有意義に過ごしたいと思っています。

最近は、連日、いじめを苦にした小中高校生の自殺が報道されています。また、いじめの辛さを訴え自殺をほのめかす手紙が、文部科学省や教育委員会に多数届いているとのことです。この頃は、様々なこころの悩みを抱えた子どもたちが多く、また、自閉症やアスペルガー症候群といった発達障害も増え、子どものこころの問題を専門にする医療機関はどこも予約がいっぱいの状態です。今年は、彼らの辛い気持ちを少しでも楽にしてあげられるよう、役に立てればと思います

早いもので医者として10年を過ごし、満足感、充実感もありますが、その半面、反省や後悔も多い10年でした。それでも、“Life goes on”という感じで、何とか医者人生は続いてきました。区切りのこの1年、新たなスタートとして、悔いのない充実した1年にしたいと思います。

本年が、平和な1年であり、会員のみなさまにとって実りの多い年であることを願っています。

昔は良かったなぁ



美唄市医師会
花田病院
伊深　清次

明けましておめでとうございます。

還暦まで健康で仕事を続けることができれば「御」の字ということで、それまでかけていた60歳満期の生命保険を受け取るようになって早や12年も経ち、今もほとんどフルタイムで働いている自分を「シンジラレナーイ」思いでいる。さすがに老眼に白内障手術・さらには飛蚊症に硝子体手術を受けた視力では、外科医としての手術などはほとんどできなくなり、外科系雑科屋を自称して増え続ける老齢の患者さんを相手のリハビリ医療や、在宅医療を支える訪問診療などの仕事に従事している。

40年程前に学位を得て一人前になったつもりで血気盛んに何でも挑戦してやろうと医局人事で地方の病院に赴任した。専門書を片手に一人で悪戦苦闘の日々が続いていたが、疲れを感じることがそんなに多くはなかったのは若かったからであろう。そんな中で忘れられない思い出になっている2手術症例を紹介します。

1例目は、昭和44年　檜山地方の産婦人科医がいない地域で出産や未熟児の診療をさせられていた頃である。第一子を帝切で出産し、第二子目のお産で既に出産予定日を過ぎた妊婦を引き受けることになり、帝切もやむなしと判断して手術を行った。新生児の泣き声を聞くまでは良かったが弛緩出血が止まらずに母体の血圧はどんどん低下してくる、絶対産婦の命を落とすことになってはならない。一大決心で腹部大動脈を露出してゴム製ネラトンカテーテルにて血行遮断、下肢を挙上してから大静脈も血行遮断して母体の血圧を維持、本人・家族の承諾を得て子宮全摘術を施行、輸血用血液の到着と同時に急速輸血を行いながら下半身の血行を再開、何とか母子共に救命することができた。

2例目は、35・6年程前になるが、日高地方で診療終了時間間際に胃出血が止まらず、(医師付き添いで)輸血を受けながら患者さん(30歳代半ばの男性）が救急車で1時間以上もかかって搬送されて来た。以前に胃潰瘍の診断が下されているのでそれを信用して病院到着即手術を決定、胃切開を加えて出血部位を確認して無事に胃切除術を終えた。(ちなみに数時間の時間外勤務を強いられたが、病院管理職ということで超過勤務手当ては支給されない）切除胃を病理組織検査に出したところ、早期癌ではあるが断端に悪性変化が認められるとの報告があった。何とか患者・家族を説得して最初の手術から2週間後に胃全摘除術に踏み切った。この患者さんは私と同年代で今でも元気に漁業に従事している。遠く離れてはいても、現在でもこの患者さん一族の健康相談医的な役割を果たさせて貰っている。

以上、医療僻地にて外科医一人勤務という厳しい条件の中での症例を紹介したが、今では到底考えられない無茶な診療行為と非難されるかもしれないし、訴訟問題にも発展しかねなかった事例かもしれない。しかし、時代背景もさることながら、医師と患者さんとの信頼関係があったからこそできたことと自らを納得させている。患者さんは皆さんが私にとって良き師であり教材であった。有難いことに数多くの良き師・良き先輩・良き友に恵まれており、悔いの残らない人生を送るべく、今年も元気に頑張っていきたい。

追記

（第2例目の方にお会いしてから1週間後にこの原稿を書きましたが、11月末に奥様から突然の訃報が届きました。享年70歳　ご冥福を祈るのみです。合掌）

日本ハムファイターズ 日本一おめでとう

札幌市医師会
西岡じび咽喉科クリニック
後藤みずほ

あまたいらっしゃる年女、年男の先生の中で無作為抽出で選ばれたとのお手紙が届いたのは日ハム日本一の興奮も覚めやらぬ10月後半。昨年は良い年だったと思い、いつも非協力的な医師会員であることの反省も込めて、この光栄を受取ることとしました。

4回目の亥年なので、半生を振り返ってみようか、最近の社会に物申そうかなどと思いましたが1,600字では無理なので、昨年一番良かったことを振り返りたいと思います。

それは何といっても日本ハムの優勝ですが、これには伏線がありましたね、駒苫の3連覇がならなかったことです。早実には恨みはないけれど、初優勝より3連覇の方が凄いのにー……。本当に残念。ある友人は2週間何もできなかったそうです。

2年前は本当に「信じられない」でしたが、2連覇はもっと凄く、昨年決勝に進めただけでも素晴らしいことで十分楽しませてもらったけれど、「でも悔しい、残念」という方がほとんどではないでしょうか？

「駒苫の仇は日ハムで」がその後の私の合言葉でした。駒苫が初優勝の時も、連覇の時も日ハムはアベック優勝できずに、高校球児からそのスピリットを、学んだ部分もあると思うので、昨年は恩返しをして欲しかったので、本当に良かったです。

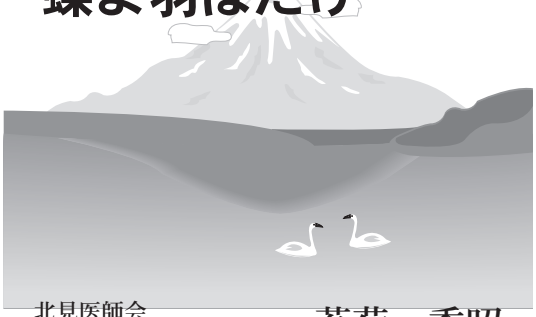
そしてあんなに満員になったのは、たくさんの人の努力はあったでしょうが、何といっても新庄選手には感謝してもしきれないものがあると思います。その花道を飾ってあげることもできて、昨年は北海道にとって近年最高の年だったでしょう。

初のパレードも盛大でした。

ひとつだけ残念なのは、田中君をドラフトのくじで引けなかったこと。本当は「田中世代」だったのに、斉藤君にこれまた恨みはないけれど「ハンカチ世代」なんて呼ばれて、ちょっとかわいそうかな？でも野村監督のもとですばらしい投手に成長してくれるでしょうから応援していきましょう。個人的には松坂選手以上ではないかと思っています。

今年もまた良いことがありますように。

蝶よ羽ばたけ



北見医師会
茗荷耳鼻咽喉科医院
茗荷　秀昭

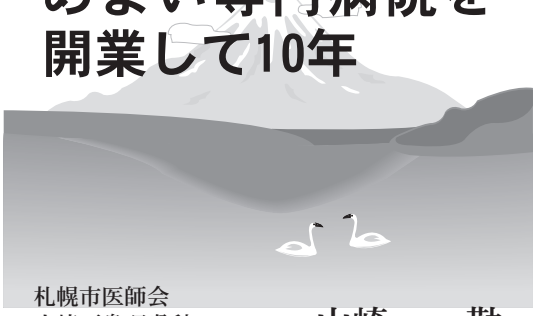
H8年、亡父の後を継いで北見市に開業しました。その時、妻と決めたことがありました。「無事、10年経ったら故茗荷昭蝶展示室を造ろう。」

親父は蝶の収集家で北見市にも蝶が縁で転居、開業した程、非常に凝っていた人物でした。私自身、子どもの頃に毎週のように親父に採集に連れて行かれた記憶がありますが、昆虫採集程度のもの。こちらは親父の後を継がず、蝶にはほとんど興味はありませんでした。子どもの頃から、親父が標本を大切に扱っているのを目にしていました。その親父がH5年に亡くなり、沢山の標本箱が残されました。興味もなく、また、北見を離れ仕事に追われる毎日を過ごしていたため、しばらくの間標本箱は放置されたままになりました。開業することになり、自宅に戻り、再び、標本箱は私の視界に入ることになるのです。「この親父の思いが詰まった蝶たちを表舞台に出さずにいていいものか」と頭の隅の隅にはあったものの、毎日、目にするにあたりこの思念が膨らんだり、萎んだり。「開業したばかりだし、余裕ないしなあ」。それで、冒頭の目標を掲げることになるのです。

いろいろなことがありながらも昨年、その

10年となり、ついに実現させました。入院設備を置かなくなった医院の２階を改装して、小さいながらも展示室を造りました。展示室は業者が工事してくれるので、希望の形をいうだけでよかったのですが、展示物の整理となるとそうはいきません。実現までの道は一筋縄ではいきませんでした。実際には蝶5418頭、甲虫他731匹（数えるだけで2時間かかりました）標本箱にして72箱あり、数も種類も沢山。その上、同じ蝶でも季節、生息地により姿を変えており、我ながら、なんてことを思い付いたものだと、戸惑うばかりでした。昆虫図鑑を紐解き、知人の知人に教えを請い、1頭ずつ並べる。気が遠くなりました。空いた時間のほとんどを費やし作業していたため、眼は疲れ、肩は凝り、子どもたちとは遊べず、私にとっても非常に厳しいものとなりました。3カ月半程かかりやっと完成に漕ぎ着け、ほっとしています。診療時間内であれば誰でも見ていただけるようになっております。10年の思いを実現し、すっきりとした気持ちで新年を迎えることができ、いい年男でいれそうな予感がします。北見市にお越しの際、暇つぶしが必要な方はどうぞいらしてみてください。

めまい専門病院を開業して10年



札幌市医師会
山崎耳鼻咽喉科
めまいクリニック
山崎　勤

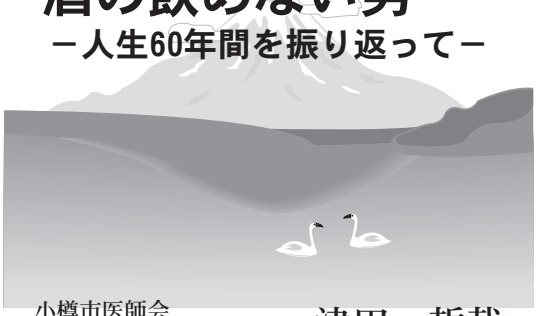
今年5月で開業10周年を迎えることになった。開業を決心してからは無我夢中でがんばってきた。はじめの頃は土曜日まで診察、日曜日の回診とほとんど休むことなく診療を続けてきた。そのうち4～5年してから、土曜日の診察は休むことにして現在に至っている。この10年間健康で1日も休むこと無く診療してこられたことは幸いであった。

めまいは患者さんの訴えで腰痛に次いで2番目に多い訴えでありながら今までめまいはほとんど系統的に診断、治療されてきたとは思われない。ここで私が日常診療でやっていて気が付いたことに少し触れてみたい。

めまいといえばメニエール病が代表的疾患と考えられているのは今も昔も変わりない。めまい患者の5～10％位と言われているが診断していくとメニエール病の初期例がもっと多いのではないかと思う。高齢化社会になり高齢者のメニエール病患者が多くなってきている印象を持っている。最近、78才の典型的メニエール病患者を経験している。高齢者のめまい患者はめまい発作は重症で時に一週間以上続くことがあり、発作の無い時でも、転倒事故を起こしやすく、特に暗所、雪道で多く、これらは暗所や雪道では視性の代償が困難になるためであり注意するよう指導している。

一方、20代前半の若い女性で以前はめまいしても病院に来なかった患者が来院するようになってきている。このようにめまいの診断と治療が確立され、より良いめまいの治療が確立されるよう努力していくつもりである。2年前から電子カルテを導入し診療に役立てている。より多くの患者さんの診療と正確なデータの蓄積に有効な手段と考えている。

酒の飲めない男
－人生60年間を振り返って－



小樽市医師会
つだ小児科
津田　哲哉

新年早々、大変ありがたいことに年男の無作為選出で「新春随想」へ依頼がありました。しかし、無作為選出方法に2回連続で選出されたのは、普段、宝くじをはじめとして食あたりもしない私には、奇跡的な事件でもあります。増して、手紙さえ書かず文章作成など碌にしたことのない、文才のない私にとって苛酷な仕打ちであります。でありますから、何を書いても良いことにさせていただきます。

私は、全くといっていい程、酒は飲めません。医者はよほど大酒飲みが多いのか、飲めない私には医者になってから随分酒の席では、苦労しました。前回（12年前）のこの欄でこのことは記載したはずですから、「酒の飲めない男　第2弾」です。60年間、その内24年間小樽に住んで数々の宴会や、その他の酒の席に出席しているうちに、ウエイトレスさん、仲居さん、スナックやクラブ（現在、小樽にはありません）の所謂おねえさん方も、私には乾杯の盃などの酒類は持ってこなくなりました。今や、宴会で私の前に酒類を持ってくる人は、小樽では「もぐり」で小樽の夜の仕事をしている人ではないと言われるまでになっております。私にとって、酒の上の「過ち」は、やりたくてもできませんが、『酒の席』での「失敗」と「恥」は、よくかいております。

①1番古い「失敗」は、小学校3年生の時。友達と正月に悪乗りして酒の飲み比べで酔って雪の中で寝てしまい、その後2日間寝たままであったこと。

②大学の入学祝いに、ピンクレディというカクテル1/2杯で、カクテルバーのカウンターで『ゲロ』してしまい、おまけにトイレまでの絨毯に点々と跡をつけてしまい友人に多額のご祝儀を店に払わせたこと。

③入局祝いの席で、当時大酒飲みで有名な教授の左隣りに座らされ、祝いの会が進み教授が左手に盃を持って、何度も「うッ」「うッ」、と差し出すのを見ていてもそれが酒の酌の催促であることを知らず無視したこととなり、あとで医局長にえらく怒られたこと。家庭環境でも、私の両親ともに酒は飲まず、これまで他人に酒を注ぐ教育を受けてなかった。今でも酒の席で酌をするタイミングが取れず、相手方に手酌させています。

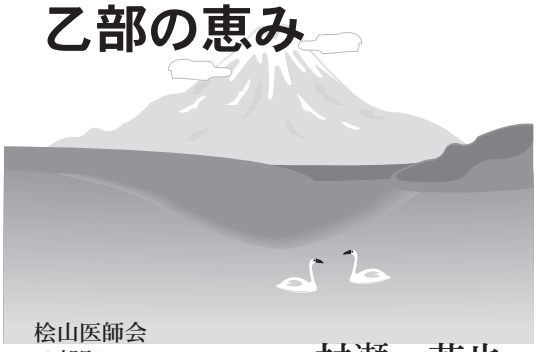
④結婚式の仏料理の口なおし「シャーベット」にアルコールが入っているのを知らず披露宴の後半は、いつも眠っていたこと。

⑤1番最近の「失敗」は、平成18年11月第59回道医師会創立記念祝賀会の懇親会の席で、飯塚会長が唐澤日本医師会会長とともに私共のテーブルにおいでになり、飯塚会長が手持ちの日本酒を私に手渡されました。私は飲めというのかと勘違いして「飯塚会長、私、お酒飲めないのですが・・・」と言ったら、「あんたに飲めと渡したんじゃなく、唐澤会長へお酌させるために渡したんだ。おかしな人だね。」と、飯塚会長にあきれられました。

以上のように、お酒を飲まれる人にとって、常識的なことでも酒が飲めず酒の作法も良く知らない人間がいることを皆様に知っていただきたいため、今回、筆を取りました。酒が飲めなくて人生楽しいことがあるのかと、よく聞かれますが、余計なお世話で、酒飲みの論理で語らないで下さい。小さな失敗はありますが、酒の上での大きな過ちはありません。最近取り締まりが厳しくなっている飲酒運転も生まれながらできません。しかし、酒が飲めないからといって長生きできる保障もありませんから、残り20年（？）楽しく人生を送れますようにと、祈っております。

お酒の飲める方、くれぐれも残りの人生、酒の上の過ちを慎むようにお願いいたします。

乙部の恵み



桧山医師会
乙部町
国民健康保険病院
村瀬　英也

道南日本海側の乙部町の病院に赴任して早や5年が経ちました。それまでこの地に訪れることも無く特にこれといった印象も持っていなかったのですが、美しい海岸線の景色に出会い日々楽しんでいます。追分ソーランラインと呼ばれる道南日本海側海岸線の景色は面白い岩や切り立った崖など車で走っていても飽きない景色が続いています。空気が乾燥した天気の良い日には奥尻島も見ることができます。住んでいる身近な所にも楽しむことのできる景色があります。乙部町南端から車で海岸線沿いの国道を、海を左手に見ながら走りしばらくすると道が右にカーブし始め、突然そして徐々に断崖絶壁が見事な館の岬（たてのさき）という岬が見えてきます。赴任した当初にはその壮大さを感じるためにわざわざ何度となく車を走らせ楽しんでいました。今はさすがにしなくなりましたが。

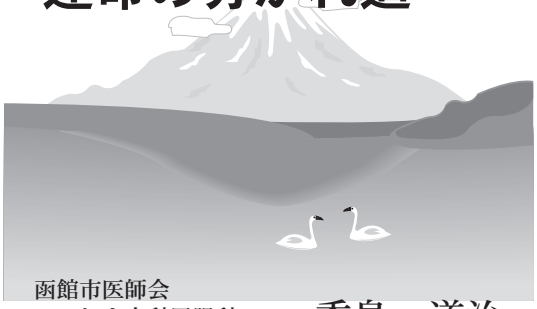
道南桧山沖ではスケソウ鱈が多く獲れ、メスから取れるたらこが乙部での一番の収入源となっています。桧山沖のスケソウ鱈ははえ縄漁で獲っており魚の傷みは少ないため福岡の高級明太子には桧山沖のスケソウ鱈のたらこが使われているそうです。明太子の一番重要な材料ですので桧山乙部のたらこ自体ももう少し有名になってもいいのではと思いますが。そのたらこも美味しいのですが、新鮮な鱈の白子タチの料理タチポンやタチの天麩羅などが毎年冬の楽しみです。また韓国で作られる鱈の塩からチャンジャも大変美味しいと思うのですが、その材料もきっと乙部から韓国に運ばれ作られているのでしょう。せっかく材料があるのですから是非乙部でも美味しいチャンジャを作ってほしいものです。

また乙部では湧き水が多くの場所から出ており5カ所を東屋風にきれいに整備し、給水施設となっておりたくさんの人が訪れて汲んでいます。私も時々湧き水を汲みに行き、その湧き水を使用してコーヒーやお茶を飲み、最近流行のスローライフ的に時間を過ごしています。

桧山地方を含む渡島半島全体は地下に良い泉源があるようで、桧山地方の各町村にはほとんどどの町に温泉があります。乙部町にも3カ所温泉があり3カ所とも泉質良く、温度も70度くらいあり掛け流しの温泉です。そのうちの1カ所の泉源が病院の横にあり病院にも温泉を引いています（お湯が熱すぎるため病院では加水するか、早めにお湯を入れて冷ましておく必要があります）。小さな病院ながら温泉が引かれて、わざわざ出掛けて行かなくても温泉に入り暖まることができるのは嬉しいです。昨年10月には病院の近くに足湯もでき多くの住民の方が訪れ楽しんでいます（冬場は閉鎖します）。

最近は温暖化のため気温が高く暑い期間も長くなり降雪量も減ってきているので、内地よりも北海道の南の気候のほうが今や過ごしやすいのではと思っています。そんな道南にある小さな町乙部で、景色・食べ物・温泉などを楽しみながらのんびり過ごすのも良いのではと思うこの頃です。

運命の分かれ道



函館市医師会
ひでしま内科胃腸科クリニック
秀島　道治

小さい頃から病弱であった私は何回も死ぬような目に遭い手のかかる子どもだったようで、肺炎になった時は当時8千円もしたペニシリンを何度も打って命拾いをしたと両親から聞いています。

当時その理由は不明なのですが、医者から「さつま芋だけは食べさせないように」と言われた両親は忠実に守っていたのですが戦後で食糧事情も悪く腹をすかして甘いものが少なかった時代でしたので「芋食べたい」とねだる私に「どうせこの子は途中で死ぬかもしれないのだから食べさせてやろう」と芋を食べさせたら、それから急に元気になりすくすく育ったそうです。さつま芋に救われたのです。元気になった私は家の近くの大きな川を覗き込んで川に落ち、水の上に浮いているのを船乗りに助けられました。

私の実家は家具屋をしておりましたが子どもが6人もおり生活も苦しかったため学校へ通う傍ら家業を手伝っていました。当時流行の九州大学合成化学科を受験し、なぜか一発で合格しました。両親も親戚も本当に喜んでくれたのですが身体検査に行くのを忘れたばっかりに不合格となってしまいました。

歯医者をしている叔父から「医者にした方が生活は安定する」とアドバイスがあり親元を離れて1年間東京の予備校に通いました。その後山口大学に入学しました。こういう経過で私は「間違えて医者になった」わけです。

山口で6年間過ごしましたが、実家の近くの久留米大学に戻って研修するようにと両親から言われました。卒業と同時に結婚した私は、大学に入局しても給料は全く無く不定期のアルバイトでやっと生活を維持していました。医局長から「お前は嫁さんと子どももいて大変だろうから北海道に出張に行け」と命令され、3カ月経ったら大学に戻ることを条件に函館にやってきました。今までは貧乏を余儀なくされ、急に高給取りになった私は毎晩酒を飲んで遊び出張を1年間に延長してもらったのです。大学に戻っても函館での楽しかったことが忘れられず、最後は医局から破門されてまで大学を辞め函館の病院へ就職しました。それから数年間は酒とバラの日々を過ごしていましたが、さすがにこれでは身が破滅すると考え、33歳の時から内視鏡とパソコンの勉強を必死になってやってきました。10年間その病院に勤めましたが、勤務医を続けるか開業するか迷いました。しかし住み慣れた函館の街を去りがたく親父に反対されましたが函館での開業を決心しました。開業して18年になりますが、今では患者さんにも恵まれ毎日楽しく仕事をさせてもらっています。

私の親父は「人生わずか50年」と言いながら一昨年90歳で亡くなりました。私自身も50年も生きられれば十分と思っていましたが、今年還暦を迎えます。幼少時2回も命拾いし医者になって35年。あの九州大学の身体検査事件がなかったら医者にはならなかったはずです。口下手で社交的なことが苦手な私が医者の道を選ばなかったらどうなっていたかを考えると医者になれと勧めてくれた叔父に感謝していますし、山口に残ることを許さなかった親父にも感謝しています。久留米大学に戻ったばかりに生活に困窮し北海道に来ることができたのです。

函館の街でいろいろな人と出遭い、数多くの人生勉強をさせて頂きました。

そして最後には生まれて初めて親に逆らい、私の好きな街函館で開業できたのです。

今年還暦を迎えるにあたって、私は人生にはその時々でいろんな分かれ道があると思っています。省みますと私は岐路の都度、運にも恵まれ、より良き道を選んでこられたことを非常に幸運な人生であったと思っております。

団塊の世代である私たちは来年一斉に定年を迎えますが、私はこれからも健康に留意し、体力の続く限り天職である医者の仕事を続けていきたいと願っております。それが私を護り育ててくれた函館の街への恩返しにつながることと信じております。